

# 元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

七 野 敏 光

- 一 案件の紹介
  - 二 方式違反（大徳八年検屍方式の概要）
  - 三 不実な検屍
  - 四 正犯人と干犯人
  - 五 検屍現場でのせめぎ合い
  - 六 肅政廉訪司と刑部官
- 一 案件の紹介

元代の法律書である『元典章』五四（刑部卷之一六）に「官典の刑名違錯・官典刑名違錯」と題される一裁判案件が見える。<sup>①</sup>方式違反の検屍を執り行い、本来ならば殺人犯たる者を傷害犯とした検屍官らの人事上の処分に關する事案である。本稿では、この案件を解読しつつ、当時の検屍制度及び刑事手続きについての理解をいささ

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

一一七

かでも深めてゆきたい。まず本案全文（口語訳及び原文）を掲げる。<sup>(2)</sup>

皇慶二（一二三三）年十一月、江西廉訪司が奉じたる江南行台の劄付。広東道廉訪司の申。審録（罪の有無を確認）したる広州路の罪囚らのうち番禺県の一件。梁伶奴らが土地を争い、互いに殴打ち合うなか、蔡敬祖・羅二・謝景德が死亡した事件について。初・復二度ある検屍のうち、初検及び最初の取調べにあつた県尹馬廷傑らの検屍は方式に違い、事件の事情を交乱し、吏貼ら下役をしてひそかに尋問を行わせ、その真情を脱落させていました。そこで移推、つまり博羅県に取調べを移し、その取調べで事件の実情を得、馬廷傑らの刑名違錯の一件を調べだし、県尹馬廷傑・典史孔鎮材各々の罪を認める供述を取り訖えました。罪は原免を経っていますが、彼らを解任・罷役し、別に求仕させるべきであると擬（判断）することといたしました。此れを得られよ（以上、広東道廉訪司の申）。この広東道廉訪司の申をうけ、江南行台が咨を移り准けたる御史台の咨。御史台が呈して奉じたる中書省の劄付。この御史台の呈をうけ、中書都省が送り扱けたる刑部の呈。県尹馬廷傑・典史孔鎮材につき一人づつ以下に議擬いたしました。具呈したれば照詳せられよ。此れを得られよ（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省は刑部の擬を准め、仰せて上の依りに施行せしむ。

県尹馬廷傑の罪を認める供述。至大四（一二三一）年四月初三日、番禺県の関を准けました。そこには「梁伶奴らが土地を争い、そのことが原因で夫蔡敬祖を打ち殺してしまいました」という蔡阿陳の告言が記されています。そこでこの一件の調べをつけるために、司吏周郁・件作行人（検屍人）杜通を引き連れて遺

体の安置される場所に赴き、屍親（被害者の遺族など死亡者の親族）杜甲・被告一千人（犯行を告げられた者など関係人）らを呼び集め、ともに初検を実施いたしました。その結果、蔡敬祖の遺体には、致命の原因とはならない軽傷が沿身上下に見られるほか、右肋に他物による痕が一つ見えます。この痕、皮膚は破れず、黒く滲んだ内出血の状態で横に広がり、長は二寸八分、闊は九分であり、紛れもなくこの痕が致命の原因でございました。こうした場合、自ずからその場で何人の犯行であるかを十分に問いただし、はっきりとした罪を認める供述を取責し、凶器を尋ねだして、それを痕傷と照らし合わせたくうえで、正犯人をして検屍帳に署名させるべきでありました。ところが実際には、不恰かつ輒しくも、梁伶奴と戴寿安とが互に罪をなすりつけ、蔡敬祖を殺めた罪を認める供述をしないことをそのまま認めて、故に省部（中書省刑部）からくだされた様式に違え、検屍帳の「正犯人」の箇所に自らの一存で「被告人」の三字を書き添え、梁伶奴と戴寿安とをしてそこに連署をさせてしまったのです。その後、博羅県が行った取調べで、三月二十九日の夜、五顯廟内で梁伶奴が戴寿安らと享神喫酒し、伶奴が木棍で蔡敬祖の右肋を打ちつけ死亡させたという事実が判明したという次第でございます。不合にも、親しく事実の究明にあたらず、司吏・貼書らをしてひそかに尋問を行わせ、蔡元卿をして「已に死亡した謝景德が木棍で兄蔡敬祖の右肋を打ちつけ地に倒したので、わたしはそれを恨みにおもい、木杷（さらい。穀類をかき集める農具の一種）で謝景德を打ち殺しました」との虚偽の供述による罪のなすりつけを行わせました。また、不合にも、梁伶奴が鎗で魏貴一を扎し傷を負わせた罪を認める供述はするも、口をつぐみ、蔡敬祖を打ち殺した罪を認める供述はしないことに従った罪でございます。罪を認めて供述いたしますところ、是れ実でございます（以上、馬廷傑の供述）。この馬廷傑の供述

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

述をうけ、刑部が議し得たり。番禺県の県尹馬廷傑が罪を認めて供述するところは、輕罪を除くほか、以下のとおりであります。すなわち、蔡敬祖の遺体の初検にあたり、右肋に見える他物による紛れもない致命の原因たる傷につき、心して十分に問いただすことをせず、輒しくも、梁伶奴らが互に罪をなすりつけて蔡敬祖を殺めた罪を認める供述をしないことをそのまま認めて、故に省部からくだされた検屍帳の様式に違え、「正犯人」の箇所自らの一存で「被告人」の三字を書き添え、梁伶奴らをしてそこに署名させたところが、移推した博羅県の取調べで、梁伶奴が木棍で蔡敬祖の右肋を打ちつけ死亡させたという事実が判明したというところであります。番禺県は取調べの端緒であります。馬廷傑は正官であり、刑名の重事たることをわきまえながら、親しく事実の究明にあたらず、司吏・貼書らをしてひそかに尋問を行わせ、彼らが正犯人梁伶奴から贓賄を受けるのを故縦し、蔡元卿をして「已に死亡した謝景德が兄蔡敬祖を打ち倒したのを見て、わたしは木杞で謝景德を打ち殺しました」との虚偽の供述による罪のなすりつけを行わせ、梁伶奴が鎗で魏貴一を扎し傷を負わせた罪を認める供述はするも、蔡敬祖を打ち殺した情由を供述しないことに従いました。そしてこのようにして事をでっちあげ、梁伶奴が蔡敬祖を打ち殺した罪を脱落させてしまったのであります。その犯すところは、すなわち刑名の違錯であります。罪は釈免に遇っていますが、先例に比して、廉訪司の擬するところに依り、現任を解き、別に求仕させ、このことにつき解由（履歴）内に標附するのが相応でありますように。

典史孔鎮材。罪を認めて供述いたしますところ、是れ実でございます。刑部が議し得たり。番禺県典史孔鎮材が罪を認めて供述するところは、輕罪を除くほか、以下のとおりであります。すなわち、「梁伶奴らが

耕地を争い、夫蔡敬祖を打ち殺しました」と蔡阿陳が告言してきたおり、彼は仕事上の過失につき取調べを受け、役務を離れていた。そして役務に復帰して検屍帳を点検したときに、県尹の馬廷傑が蔡敬祖の遺体の初検にあたり、右肋の一痕を致命の原因たる傷としながらも、彼自身でそれを問いただし、はつきりとさせることもなければ、凶器を尋ねだすこともなく、方式に違えて検屍帳「正犯人」の箇所、自らの一存で「被告人」の三字を書き添え、梁伶奴をしてそこに署名させていることを発見したが、それを疏駁することなく、そのまま総府に備申したところが、その後、博羅県の取調べで梁伶奴が蔡敬祖を打ち殺したという事実が判明した、ということであります。（馬廷傑は）刑名の重事たることをわきまえながら、不合にも、担当吏楊棟らをしてひそかに尋問を行わせ、彼らが贓賄を受けるのを故縦し、蔡元卿をして「已に死亡した謝景德が木棍で兄蔡敬祖を打ち倒したのを見て、わたしは木杷で謝景德を打ち殺しました」との虚偽の供述による罪のなすりつけを行わせ、梁伶奴が鎗で魏貴一を扎し傷を負わせた罪を認める供述はするも、蔡敬祖を打ち殺した実情を供述しないことに従いました。（孔鎮材は）このようにぐるになって事をでっちあげ、梁伶奴が人を殺した情由を脱落させてしまったのです。その犯すところは、すなわち刑名の違錯であります。罪は釈免を経えますが、広東道肅政廉訪司の擬するところに依り、現役を解き、別に求仕させ、このことにつき解由内に標附するのが相応でありましょう。皇慶二年十一月、江西廉訪司奉江南行台劄付。広東道廉訪司申。審録広州路罪囚数内番禺県一起。梁伶奴等因争田土、互相争打、蔡敬祖・羅二・謝景德身死等事。初検元問官県尹馬廷傑等検査違式、変乱事情、縦令吏貼私下取問、出脱真情。移推博羅県帰問得実、照出違錯事理、取訖県尹馬廷傑・典史孔鎮材各招伏。罪経原免、擬合解任罷役、別行求仕。得此。移准御史台咨。

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

呈奉中書省劄付。送拋刑部呈。逐一議擬于後。具呈照詳。得此。都省准擬。仰依上施行。／  
至大四年四月初三日、准本県関。蔡阿陳告、梁伶奴等因爭田土、將夫蔡敬祖打死。將引司吏周郁・件作行人杜通、於停屍去處、呼集屍親杜甲・被告一千人等、眼同初檢得。已死蔡敬祖沿身上下、除輕傷不係致命外、右肋一痕、係他物痕。皮不破、血不出、滲黑色橫、量長二寸八分、闊九分、的係致命身死。自合當場窮問端的何人行兇、取責明白招伏、追究器械、比對痕傷、令正犯人於屍帳上画字。不合輒憑梁伶奴與戴寿安互推不招、故違省部元降体式、於屍帳內正犯人名下、擅添被告人三字、令梁伶奴・戴寿安簽名画字。在後、博羅県問得、梁伶奴於三月二十九日夜、在五顯廟內、戴寿安等享神喫酒、伶奴用木棍於蔡敬祖右肋打着身死。不合不行躬親追究、輒令司吏・貼書人等私下取問、教令蔡元卿虚指、已死謝景德用木棍將兄蔡敬祖右肋打訖一下倒地、元卿嗔恨、用木杷頭將謝景德打死。又不合信從梁伶奴止招用鎗扎傷魏貴一、結諱不招打死蔡敬祖罪犯。招伏是實。本部議得。番禺県尹馬廷傑所招、除輕罪外、止以初檢蔡敬祖屍傷、右肋他物一痕的係致命、不行用心研問、輒憑梁伶奴等互推不招、故違元降屍傷体式、於正犯名下擅添被告人三字、令梁伶奴等於下画字、移推博羅県問得、梁伶奴用木棍將蔡敬祖右肋打着身死。本県歸問之初。馬廷傑係是正官、明知刑名重事、不行躬親推究、輒令司吏・貼書私下取問、故縱取受正犯人梁伶奴贓賄、教令蔡元卿虚指、眼見已死謝景德將兄蔡敬祖打倒、蔡元卿用木杷頭將謝景德打死、及依從梁伶奴止招用鎗扎傷魏貴一、不招打死蔡敬祖情由。如此捏合、出脫梁伶奴打死蔡敬祖情罪。原其所犯、即係刑名違錯。罪遇釈免、比例合依廉訪司所擬、解見任、別行求仕、標附相庇。／  
典史孔鎮材。招伏是實。刑部議得。番禺県典史孔鎮材所招、除輕罪外、止以蔡阿陳告梁伶奴等爭耕田土、將夫蔡敬祖打死、此時孔鎮材因事被問。還役卷內明見、県尹馬廷傑初檢蔡敬祖屍傷右肋

致命一痕、馬県尹不行窮問明白、追究兇仗、違例於屍帳正犯人下、擅添被告人三字、令梁伶奴画字、不行疏駁、輒与備申総府、在後、博羅県問得、的係梁伶奴將蔡敬祖打死。明知刑名重事、不合輒令該吏楊棟等私下取問、故縱受贓、教令蔡元卿虚指、眼見已死謝景德用棍將兄蔡敬祖打倒、蔡元卿用木柅頭將謝景德打死、依從梁伶奴止招用鎗扎傷魏貴一、不招打死蔡敬祖実情。如此串套捏合、出脱梁伶奴殺人情由。原其所犯、即係刑名違錯。罪經积免、若依本道肅政廉訪司所擬、解見役、別行求仕、標附相應。

・ ・ ・ ・ ・

至大四（一三二一）年三月末に、広州路番禺県で、梁伶奴らが土地を争い互いに殴打し合うなか、蔡敬祖・羅二・謝景德の三名が死亡するという事件が起きる。殴打に加わったのは、梁伶奴・戴寿安・謝景德と蔡敬祖・蔡元卿・魏貴一らの六名と、梁伶奴方か蔡敬祖方かは不明な羅二の計七名。死亡した蔡敬祖の妻蔡阿陳の告言「梁伶奴らが土地を争い、そのことが原因で夫蔡敬祖を打ち殺してしまいました」で事件が明るみに出、番禺県の尹馬廷傑らによる検屍及び最初の取調べが実施され、その場で関係者らの供述がとられる。

問題となるのは蔡敬祖の殺害者いかんである。このことについては、後にその虚偽たることが明らかになる、検屍現場で得られた蔡元卿の供述「已に死亡した謝景德が木柅で兄蔡敬祖の右肋を打ちつけ地に倒したので、わたしはそれを恨みにおもい、木柅で謝景德を打ち殺しました」に沿い、殺害者の謝景德が既に死亡したものとして事の処理がなされてきたと考えられるが、本件を審録した広東道廉訪司はこの点につき疑いをさしはさむ。そしてそのために、博羅県に取調べを移し、その取調べのなかで馬廷傑らによる方式に違反した検屍の実態が暴かれることになる。<sup>(3)</sup>

実際に蔡敬祖を殺害したのは梁伶奴である。ところが、彼は「鎗で魏貴一を扎し傷を負わせた」と供述し魏貴一傷害の事実は認めるも、蔡敬祖殺害の事実は認めず、實際手にかけて蔡敬祖を殺害した正犯人としては検屍帳に署名しようとしなない。そのために、馬廷傑は自らの一存で検屍帳上に印刷された「正犯人」の箇所に「被告人」の三字を書き添えるという様式上の方式違反を犯し、梁伶奴と戴寿安とをしてそこに連署させる。この「被告人」の三字を書き添えるということは、彼らを蔡敬祖の殺害者とはしないという意ととれる。「正犯人」と絡めて「被告人…告言された者」を読みとるにしても、あくまで正犯人として告言された者ということであり、正犯人そのものではない。そしてこのこととつじつまを合わせ、既に死亡した謝景德を蔡敬祖の殺害者に仕立て上げるために、蔡元卿をして虚偽の供述による罪のなすりつけを行わせたと考えられる。もちろん、蔡敬祖の遺体の右肋に見える他物による痕が、紛れもなく致命の原因であるとする検屍結果を踏まえたものであろう。

典史孔鎮材は検屍現場に臨んでいない。検屍帳様式上の方式違反はひとり馬廷傑によって行われた。だが、孔鎮材も事後この馬廷傑による方式違反をほぼ承知しながら、あえてそれを咎めだてせず、方式に違反した検屍帳をそのまま広州路の総管府に上申し、本来ならば殺人犯たる梁伶奴が傷害犯として軽く処罰されるという不正の一端を担う。正官たる県尹馬廷傑と典史孔鎮材とがともになり、蔡敬祖殺害と魏貴一傷害との刑名を違錯した。本件が「官典の刑名違錯」と題される所以である。

(1) 岩村忍・田中謙二校定『校定本元典章刑部』（京都大学人文科学研究所元典章研究班、第一冊一九六四年十二月、第二冊一九七二年七月。以下では「校定本」と略称する）第二冊五五一頁以下。陳高華等点校『元典章』（天津古籍出版社・中華書局、二〇一一年三月。以下では「点校本」と略称する）第三冊一八三〇頁以下。



(2) 以下本稿での史料掲載は、第二節の「検屍方式」を例外として、この口語訳・原文を掲げるといふ形式をとる。また本文中特に示すことはないが、掲載史料に続く最初の一段落は案件の概略を記す。承知されたい。

(3) 審録について「察司体察等の例・察司体察等例」(『元典章』六・台綱卷之二。至元六〇―一二六九年二月、中書省が欽奉せる聖旨。点校本第一冊一五五頁以下)の一項に、提刑按察司(至元二八―一二九一年に「肅政廉訪司」と改称する)は「所管の地の重刑案件について、上下半年ごとに親しく文案を参照(調査)せよ。この文案の参照に際しては、情を以てその重刑囚と対面して審視し、若し文案と異なる供述がなければ、路の総管府に行移し、結案したうえで刑部に上申して回報を待たせよ。なお、審視した件数と復審の文状とを御史台に報告せよ。この文案の参照において重刑囚が路での罪を認める供述を翻した場合、及びそのほかに疑わしい点がある場合には、提刑按察司自らが推鞠(取調べ)をすることを聴す。若し事が多人数に関わり卒(にむ)かに帰結し難い場合は、近隣のかかわりなき官司に移委し、再び実情を磨問(調査)させよ。この実情の磨問において若し疑点がある場合にも、亦た繰り返し推問することを聴し、冤枉(冤罪と法を枉げること)がないようにさせる。その他の罪囚についても、亦た親しく録問し、若し冤滞(冤罪と手続きの滞り)があれば、随(た)即(た)に冤を改め身柄を解放せよ。統軍司・転運司並びにその他の衙門の罪囚についても、亦た仰せて一体に施行せしむ。所在重刑、每上下半年、親行参照文案。察之以情当面審視、若無異詞、行移本路総管府、結案申部待報。仍具番過起数復審文状申台。其有番異、及別有疑似者、即聴推鞠。若事関人衆卒難帰結者、移委隣近不干礙官司、再行磨問実情。若有可疑、亦聴復行推問、無致冤枉。其余罪囚、亦親録問、若有冤滞、隨即改正疏放。統軍司・転運司并其余衙門罪囚、亦仰一体施行」とある。ここでは番禺県から広州路へ上申された案件につき、それが結案して中央刑部に上申される前に広東道廉訪司の審録となる。なお取調べが移委された博羅県は惠州路に属する(『元史』地理志五・卷六二・志一四)。

## 二 方式違反（大徳八年検屍方式の概要）

『元典章』四三（刑部卷之五）冒頭「検屍方式・検屍法式」には、大徳八（一三〇四）年当時の検屍方式が詳しく記される。<sup>①</sup>ここではそれを、便宜、検屍帳の様式を記した「屍帳式様」と検屍の実施次第についての記述を含む「刑部呈」との二つの部分に分け、前者については原文をそのままに、後者については口語訳と原文とを掲げたうえで、そこに見える検屍方式と馬廷傑らの検屍とを重ね合わせ、その方式違反いかんを確認したい。

### 〔屍帳式様〕

某路某州某県某処、某年月日、某時、檢驗到某人屍形。用某字幾号、勘合書填、定執生前致命根因、標注于後。

一、仰面（図省略）

一、合面（図省略）

一、对衆定驗得某人委因□□□□致命

一、検屍人等

正犯人某

干犯人某

干証人某

地隣人某

主首某

坊・里正某

屍親某 仵作行人某

右件、前項致命根因、中間但有脱漏不実、符同捏合、増減屍傷、検屍官吏人等、情願甘伏罪責無訶、保結是実。

某年某月某日 司吏某押

首領官某押

検屍官某押

〔刑部呈〕

大徳八（二三〇四）年三月□日、江西行省が准<sup>うけ</sup>たる中書省の咨。刑部の呈……刑部が議し得たり。検屍には、已に常式が定められております。ところが、近年、親民にあたるべき地方官が人命をもつて重しとはなさず、往々にして検屍の実施を遅らせて、遺体に変化をきたさせたり、親しくその監視に臨まずに公吏や行人（検屍人）に検屍をまかせたり、（初検官）と復検官とが互いになれあい、でたらめな検屍結果をでっちあげたり、傷の軽重をかえたりなどと、不正の弊害は多端にわたります。まさに法規を設けて不正の防止に備えるべきであると擬（判断）することといたします。（先に江西福建道奉使宣撫が呈文にて提言をよせてきておりますが）もしその提言に依るならば、縷細に過ぎるように思われます。そこで今刑部が奉使宣撫の提言も参酌して、検屍帳の様式を定めました。すなわち、検屍帳には屍身図、その一つは仰面図、いま一つは合面図をえがき、その様式に従ったものを各路一様に印行し、字号を組み合わせた勘合（認識符号）を印記して州・県に下し、帳簿を設けて保管するようにさせる。そしてもし検屍の必要に遇えば、ただちに時元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

限を定めて、附近のかかわりなき官司に文書を行移し、急速に人を差<sup>つか</sup>わし公文を投下し、よって首領官吏と熟練の件作行人（検屍人）を引き連れた正官を検屍に差わせる。このとき、もと路よりくだされた検屍帳三幅を携行して、速やかに遺体の安置される場所に赴かせ、検屍に従うべき人や犯人ら呼び集め、正官が親しく監視して、衆目のなか、遺体の上から下に至るまで、一つひとつ分明子細に検驗し、その応有<sup>すえて</sup>の損傷を遺体に沿って指でさし示しながら説明をくわえ、屍身図上の被傷箇所<sup>ながさひろさ</sup>に長・潤・深淺<sup>ふかさ</sup>各々の数値を記し、はっきりとした致命の原因を確定し説明する。検屍にあたった官吏らは三幅の検屍帳上に署押し、一幅は苦主（被害者の遺族）に給付し、一幅はのりづけし連ねて一件文書の一部とし、一幅は本管（路の総管府）の上司に上申させる。なお苦主と検屍に従うべき関係人ら連名の甘結（誓約）を取り、様式どおり備細に記し、その日のうちに検屍を保結終了し、検屍現場に至る里程、検屍命令を承けた日時と、検屍に出発した日時を明確に記して、本管の上司に飛申回報する。復検にあたった官吏が上の依り<sup>よ</sup>に復検し終わったときにも、また検屍帳一幅は苦主に給付し、一幅は一件文書の一部とし、一幅は上司に申報する。もし違慢の罪があり、或いは検屍を命ずる牒<sup>だ</sup>が到るもそれを受けず、遺体に変化をきたさせた場合、正官には杖三十七下を決し、首領官吏には（官員にも吏員にも）各の杖四十七下を決す。親しくその監視に臨まず、公吏に検屍をまかせた場合、傷を増減する不実をなし、傷の軽重をかえ、致命原因を確定しきれなかった場合、或いは初・復検にあたる官吏らが相まみえ、検屍結果につき口裏を合わせた場合、正官はその罪を認める供述を取り事の軽重を量って、断罪黜降し、首領官吏には各の杖五十七下を決し、役を罷める。件作行人には杖七十七下を決す。財物を受けている場合には枉法（財を受けて法を枉<sup>ま</sup>げる）の罪と同じく論じ、任期満了時にその旨を解

由（履歴）内に記す……もし呈を准められるならば、遍行く照会されるのが相応でありましょう。今定擬した検屍帳・屍身図の様式を前掲いたします。具呈したれば照詳せられよ（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省は刑部の擬を准め、今検屍帳の様式を採録し連ねて前掲する。除外、江西行省に咨を移り照驗して、合属に遍行し、上の依りに施行せられんことを請う…大徳八年三月□日、江西行省准中書省咨。刑部呈……本部議得。検驗屍傷、已有常式。近年以来、親民之官、不以人命為重、往往推延、致令發變、及不親臨監視、軫委公吏・行人、与復檢官司、遞相扶同、装捏屍狀、移易輕重、情弊多端。擬合設法関防。若依奉使宣撫所言、似為縷細。本部今參酌、定立屍帳。図画屍身、一仰一合、令各路一樣板印、編立字号勘合、用印鈐記、發下州・県、置簿封収。如遇検屍、隨即定立時刻、行移附近不干碍官司、急速差人投下公文、仍差委正官、将引首領官吏、慣熟件作行人。就賚元降屍帳三幅、速詣停屍去処、呼集応合聽檢并行兇人等、躬親監視、对衆眼同、自上至下、一一分明子細檢驗、指説沿屍応有損傷、即於元画屍身上、比对被傷去処、標寫長濶深淺各各分数、定說端の要害致命根因。檢屍官吏、於上署押、一幅給付苦主、一幅粘連入卷、一幅申連本管上司。仍取苦主并聽檢一千人等連名甘結。依式備細開写、当日保結回報、明白称說各処相離里路、承發檢驗日時、飛申本管上司。其復檢官吏、依上復檢了畢、亦将屍帳一幅給付苦主、一幅入卷、一幅申報上司。如有違慢、或牒到而不受、致令屍變者、正官決三十七下、首領官吏各決四十七下。其不親臨監視、軫委公吏檢驗、并増減不実、移易輕重、定執致命因依不明、或初・復檢官吏相見、符同屍狀者、正官取招量事輕重、断罪黜降、首領官吏各決五十七下、罷役。件作行人決七十七下。受財者同枉法論、任滿於解由内開写……如蒙准呈、遍行照会相応。今将定擬屍帳・凶身式樣在前、具呈照詳。都省准擬、今将屍帳式樣録連在前。除外、

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

合行移咨請照驗、遍行合屬、依上施行。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ここに見える検屍方式と重ね合わせると、馬廷傑は明白な方式違反を犯している。前節で既に述べたように、検屍帳上「検屍人等」に署名させる項目「正犯人某 干犯人某／干証人某 地隣人某／主首某 坊・里正某／屍親某 伴作行人某」という様式を改変し、「被告人梁伶奴・戴寿安」と連署させたことは最も明白な違反で、かつ「已に死亡した謝景德が木棍で兄蔡敬祖の右肋を打ちつけ地に倒したので、わたしはそれを恨みにおもい、木柵で謝景德を打ち殺しました」と蔡元卿をして虚偽の供述による罪のなすりつけを行わせたことと絡んで刑名の違錯（謝景德にその罪をなすりつけて梁伶奴による蔡敬祖殺害の罪を覆い隠し、梁伶奴は魏貴一を傷害しただけとする）に直接連なる。被告人はかならずしも正犯人ではないのである。だが、それ以外に、少なくとも一つの明白な方式違反を指摘することができる。この違反につき、当時の検屍方式の概要説明もかねてみていこう。

ひとまず検屍方式の大枠について述べる。検屍官は各路一様に印刷し州・県に下された検屍帳を三幅携行して遺体の安置される場所に赴く。「一幅は苦主に給付し、一幅はのりづけし連ねて一件文書の一部とし、一幅は本管の上司に上申させる」ため、都合三幅の検屍帳が作成されたのである。<sup>(2)</sup> 検屍は初検と複検の二度にわたり実施されるが、この二度の検屍が実施される間に遺体に変化をきたしてはならない。そのため、検屍の実施には自ずから迅速性が重んじられ、命令を承ければ速やかに検屍を開始し、またそれを一定の期限内に終了することが求められた。緩慢な検屍の実施は許されない。後に述べるように処罰の対象である。検屍帳の末尾には「某年某月某日 司吏某押／首領官某押／検屍官某押」と、検屍帳作成年月日を記したうえで検屍官らが署押することとさ

れており、また「検屍現場に至る里程、検屍命令を承けた日時と、検屍に出発した日時を明確に記して、本管の上司に飛申回報する」こととされていた。

こうした検屍帳の携行、実施の制限という大枠についての方式違反はなかったようであるが、検屍官吏等の構成について、馬廷傑らの検屍には明らかに違反がある。検屍には「首領官吏と熟練の件作行人を引き連れた正官」が差わされることになっているが、この度の馬廷傑を正官とする検屍に同行した者として具体名が挙げられるのは、司吏周郁・（貼書）楊棟と件作行人杜通のみであり、一行中に首領官はいない。孔鎮材は検屍現場に臨んでいないが、ほかならぬ典史孔鎮材こそが、事の判断にあたる正官たる県尹馬廷傑のもと、もっぱら文書を管掌する首領官として検屍現場に赴くべき官員だったであろう。<sup>(3)</sup> 刑部がまとめた孔鎮材の罪を認める供述をそのまま引用すると、検屍が実施されたとおり彼はちょうど、「仕事上の過失につき取調べを受け、役務を離れていた。そして役務に復帰して検屍帳を点検したときに、県尹の馬廷傑が蔡敬祖の遺体の初検にあたり、右肋の一痕を致命の原因としながらも、彼自身でそれを問いただし、はつきりとさせることもなければ、凶器を尋ねだすこともなく、方式に違えて検屍帳「正犯人」の箇所に、自らの一存で「被告人」の三字を書き添え、梁伶奴をしてそこに署名させていることを発見したが、それを疏駁することなく、そのまま総府に備申した」だけであり、孔鎮材は検屍に関わるも、それは事後のことであり、検屍現場に赴いた検屍官吏等の一員としては検屍に関わっていないのである。

方式違反すべてが処罰等の対象となるわけではない。「刑部呈」を要約すると、検屍を速やかに実施せず遺体に変化をきたさせた場合、親しく監視せず公吏に検屍をまかせた場合、検屍結果に不実をきたして致命の原因を確

定しきれなかった場合、初・復検にあたる官吏らが検屍結果につき口裏を合わせた場合など、方式違反が直接検屍結果に影響を及ぼす場合が処罰等の対象である。<sup>(4)</sup>馬廷傑らの検屍のように検屍帳の様式を改変し、「被告人梁伶奴・戴寿安」と連署させたことや、首領官たる典史孔鎮材が検屍現場に赴かなかったことは、方式違反ではあるが、それ自体直接検屍結果に影響を及ぼす違反ではなく、したがって処罰等の対象とはされなかったと考えられる。

検屍現場でどのように検屍が実施されたかという、検屍の実際についてみてみよう。「刑部呈」には「検屍に従うべき人や犯人らと呼び集め、正官が親しく監視して、衆目のなか、遺体の上から下に至るまで、一つひとつ分明子細に検驗し、その応有の損傷を遺体に沿って指でさし示しながら説明をくわえ、屍身図上の被傷箇所<sup>(5)</sup>に長・潤・深淺各々の數値を記し、はつきりとした致命の原因を確定し説明する」と検屍のあり方次第が示される。重ね合わせると、馬廷傑は「屍親杜甲・被告一千人らと呼び集め、ともに初検を実施」したうえで、「蔡敬祖の遺体には、致命の原因とはならない輕傷が沿身上下に見られるほか、右肋に他物による痕が一つ見えます。この痕、皮膚は破れず、黒く滲んだ内出血の状態で横に広がり、長は二寸八分、闊は九分であり、紛れもなくこの痕が致命の原因」であると（内出血ゆえ痕の深淺は示さない）、親しく検屍を監視し、正しく致命の原因を確定している。

ここまで、つまり「刑部呈」に見える検屍のあり方次第について方式違反はないのだが、これ以後に行われるべき正官としての肝心な職務が適正には行われていない。誰がどのようにして検屍で確定した致命の原因たる傷を負わせたかなどの事実究明、つまり検屍現場での取調べに馬廷傑は親しくあたっていないのである。検屍の実



務については件作行人杜通がいるとして、広東道廉訪司が彼を「初検及び最初の取調べにあたった県尹馬廷傑・初検元問官県尹馬廷傑」と記すことからすると、この取調べにあたるこそが検屍帳に「検屍官」として署押する馬廷傑の職務の要と考えられそうなものである。検屍現場はまた即ち最初の取調べの場でもあった。「こうした場合、自ずからその場で何人の犯行であるかを十分に問いただし、はっきりとした供述を取責し、凶器を尋ねだして、それを痕傷と照らし合わせたうえで、正犯人をして検屍帳に署名させるべきでありました」と馬廷傑は供述する。しかし実際にはそうせずに、刑部がいうように「親しく事実の究明にあたらず、司吏・貼書らをしてひそかに尋問を行わせ、彼らが正犯人梁伶奴から贓賄を受けるのを故縦し」たことからこの度の事態へと向かうことになったと考えられる。あるいは馬廷傑自身が事に相対したときには、司吏周郁らが贓賄を受けたことから、既に梁伶奴の言い分（魏貴一傷害の事実は認めるも、蔡敬祖殺害の事実は認めない）を聴きいれなければならぬ、いわばにっちもさっちも行かない状況に陥っており、苦肉の策として、被告人としての検屍帳への署名を梁伶奴らに求め、また既に死亡した謝景德を蔡敬祖の殺害者に仕立て上げたのではないだろうか。ともあれ、こうした取調べのあり方次第について、ことさら「刑部呈」に記されるところはない。いわずもがなの検屍官心得だったといえそうである。

(1) 校定本第一冊一六七頁以下。点校本第三冊一四八〇頁以下。岩村忍「元典章刑部の研究」（東方学報・京都二四冊、三〇～三三頁、一九五四年）に訓読訳がある。

(2) 「本管の上司」について口語訳では「本管（路の総管府）の上司」とした。例えば、「品官を擅決することを得ず・不得擅決品官」（『元典章』三九・刑部卷之一。大徳三〇一二九九年五月、御史台が奉じたる中書省の劄付。校定

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

本第一冊一三頁以下。点校本第三冊一三四一頁以下）に「<sup>たけ</sup>掇けたる御史台の呈。随路の府・州・司・県の官員が、軍需の供給・造作・差税の課程に違慢し、本路の總管府が<sup>あた</sup>就便に的決する事の為にす……奉じたる都堂の鈞旨。随路の府・州・司・県の官員は、俱に朝廷の命官に係る。遇し罪犯が有れば、はつきりとした罪を認める供述を取責し、路が刑部に上申し刑部が都省に上呈して都省が詳斷する。總管府の上司が、擅便処決してはならない。此を奉ぜよ…掇御史台呈。為随路府・州・司・県官員、供給軍需・造作・差税課程違慢、本路總管府就便的決事……奉都堂鈞旨。随路・府・州・司・県官員、俱係朝廷命官。遇有罪犯、取責明白招伏、申部呈省詳斷。其總管府上司、並不得擅便処決奉此」とある。このことから推察すると、原文「本管上司」は「本路總管府上司」を約めたものに間違いない。

(3) 第三節の検屍案件では方式どおり正官・典史・司吏で検屍官吏が構成されている。すなわち「<sup>た</sup>検屍して打死を病死とする」では、初檢（正官）成安県達魯花赤太帖木兒・（首領官）典史趙璧・（司吏）周德華／復檢（正官）肥郷県達魯花赤亦的・（首領官）典史李栄・（司吏）孫榮祖で検屍官吏が構成され、「官吏の検屍違錯」では、（正官）鄒平県県尹張亨・（首領官）典史宋宥・（司吏）劉居敬で検屍官吏が構成されている。

(4) 明刑律・斷獄「<sup>た</sup>検屍屍傷不以実」条は「<sup>た</sup>屍傷を檢驗する際に、若し<sup>た</sup>検屍を命ずる牒が到るも口実をつけて即ちに檢驗せず、遺体に変化をきたさせた場合、及び親しくその監視に臨まず、吏卒に<sup>た</sup>検屍をまかせた場合、若しくは初・復檢にあたる官吏らが相まみえ、<sup>た</sup>検屍結果につき口裏を合わせた場合、及び心して<sup>た</sup>檢驗にあたらず、傷の輕重をかえ、傷を増減し、不實にして致命原因を確定しきれなかった場合、正官は杖六十、首領官は杖七十、吏典は杖八十とする。件作行人の<sup>た</sup>檢驗が不実なのに、これに口裏を合わせた者も、同様の罪とする。不実な<sup>た</sup>檢屍結果により罪に増減が有る者は、失して人の罪を出入するを以て論ず。若し財物を受けて故に不実な<sup>た</sup>檢驗をする者は、故に人の罪を出入するを以て論ず。受けた<sup>た</sup>賊が重い者は、その枉法（財を受けて法を枉げる）の<sup>た</sup>賊を計り、故出入人罪と受財枉法罪の重きに從つて論ずる…凡<sup>た</sup>檢驗屍傷、若牒到託故不即<sup>た</sup>檢驗、致令屍変、及不親臨監視、<sup>た</sup>転委吏卒、若初・復<sup>た</sup>檢官吏相見、符同屍状、及不為用心<sup>た</sup>檢驗、移易輕重、増減屍傷、不実定執致死根因不明者、正官杖六十、首領官杖七十、吏典杖八十。件作行人<sup>た</sup>檢驗不実、符同屍状者、罪亦如之。因而罪有増減者、以失出入人罪論。若受財故<sup>た</sup>檢驗不以実者、以故出入人

罪論。賊重者、計賊以枉法從重論」と規定する。ここに見える処罰等の対象とのつながりが指摘できそうである。唐律にはこれにあたる規定はない。

### 三 不実な検屍

方式違反の検屍といっても、馬廷傑らの検屍は検屍結果自体に不実あるものではない。致命の原因は正しく確定している。検屍と検屍現場での取調べが一体とされた当時の検屍制度ならではの事案といえよう。もちろん当時にあっても検屍結果自体が不実な検屍もあり、『元典章』刑部にはそうした事案を含む案件もまた収められている。本論からしばらく離れ、ここで不実な検屍の事案を含む二つの案件を紹介しよう。賄賂の收受や検屍現場での取調べのあり様などに馬廷傑らの検屍と相通ずる検屍制度の問題点がみてとれる。

まずは「検屍して打死を病死とする・打死驗作病死」(『元典章』五四・刑部卷之一六)をみてみる。<sup>(1)</sup> 検屍官(初検・復検官)が母親を誤殺した加害者の弟から賄賂を受けて打死を病死とした事案である。

大徳十一(一三〇七)年□月、行台が准けたる御史台の咨。御史台が承奉せる中書省の劄付。都省が近ごろ拠けたる刑部の呈。その呈に備したる磁州の知州張奉訓の呈。成安県の人戸田雲童が正月初二日に弟田二を麵打ち棒で殴打し、なだめに入った母阿耿の頭を誤って打傷し、初三日に阿耿が死亡いたしました。この件につき田雲童の舅耿端が訴えるも、同県の達魯花赤太帖木児は見えて見ぬふりをしてそれを受理しませんでした。したが、劉主簿に訴え、事に関わる一千人らが捉えられて官に到りました。そして達魯花赤太帖木児が初検

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

にあたり、遺体の頭頂右より口の開いた新しい打ち傷、長九分、闊三分があるのにそれを火傷の傷として検屍帳に記し、額・左手・右肩・腰に見える青い腫、口内の出血については俱に傷の状態を検屍帳に記さず、人をして肥郷県の復検にあたる官吏にも屍状をでっちあげ、中風による病死という検屍結果を下してくれるよう要請いたしました。卑職はここに官吏の金品取受という不正を調べだし、田雲童等の罪を認め供述することば詞を上申いたしました。広平路は上司に申覆することなく、ただ些細な不備につき照査しただけで、また卑職にも取調べをおえさせた次第であります。事に妨げあること言うに尽くせません。そこで看詳いたしました。人の子たる道は理としてまさに本、つまり父母に報いることであり、母を殴打し死亡させてしまふとは、これより罪大なるは莫しであります。もし僭呈に應じて、こちらに官員を差し向けられ、審録（罪の有無を確認）して処分を決定していただけないようでありますならば、実に卑職独力では処理するわけにはいかぬ事であります。此を得られよ（以上、張奉訓の呈）。この張奉訓の呈をうけ、本件につき特に前両淮漕運塩使司の同知忽都牙里を差わし取調べをしたところ、張奉訓の申すところは事実でありました。田雲童については別に判断を下して結案するほか、張奉訓が調べだした「田雲童の弟田安の中統鈔一十五定・雑色暗花段子八疋・毛子一疋を受けました」という成安県達魯花赤太帖木児の供述調書に見える罪を認める供述について、返還分は除外して、自身のものとした鈔七定、至元鈔に換算して七十貫については、枉法（財を受けて法を枉げる）の例に依り、杖八十七下を執行し訖わり、官籍から名を除き再び叙用しないことといたします。典史趙壁が田安に要めた中統鈔四定三十両・段子三疋のうち、返還分は除外して、自身のものとした中統鈔一定は、枉法にあたります。金品取受を取り次いだ司吏周德華が受けた田安の中統鈔三定、至元鈔に

換算して三十貫は、不枉法（財を受けるも法は枉げない）にあたります。各の杖五十七下を執行し訖り、役を罷め、再び叙用しないことといたします。「ふとせき不合法にも田安の酒食をうけ、復検した屍傷を検屍帳に記さず、中風による病死という検屍結果を下しました」という肥郷県の達魯花赤亦的・典史李榮・司吏孫榮祖の供述調書に見える罪を認める供述について、達魯花赤亦的は量りて杖四十七下を執行し、職を罷め、再び叙用しないことといたします。典史李榮は杖五十七下、役を罷めることといたします。司吏孫文質がまた罪を認めて供述する、要めたる中統鈔三定、至元鈔に換算して三十貫は、枉法にあたります。杖七十七下を執行し、役を罷め、再び叙用しないことといたします。広平路の正官・首領官が、不合にも、即ふたうちに上司に飛申し、達魯花赤太帖木兒らを召喚し、路に赴き取調べをおえなかった罪については別に結案するほか（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省が議し得たり。知州張奉訓が、守正奉公にして、省部（中書省刑部）に直接上申し、悪逆の重事を明らかにし、枉法官吏を糾したことは、特別に昇進させるほか、合下あみちに仰せて照驗施行せしむ。大徳十一年□月、行台准御史台咨。承奉中書省劄付。近拠刑部備磁州知州張奉訓呈。成安県人戸田雲童、於正月初二日、將弟田二用趕麵杖殴打、伊母阿耿向前解勸、誤於頭上打傷、初三日身死。伊舅耿端陳告、本県達魯花赤太帖木兒看循、不肯受理、於本県劉主簿処告過、勾捉一千人等到官。達魯花赤太帖木兒初検得、本屍頂心偏右新打破瘡口、長九分、闊三分、写作灸瘡癰痕、并額上・左手・右肩・腰間青腫、口内血出、俱不写入傷狀、令人邀請肥郷県復検官吏捏合屍狀、定驗作因風氣病身死。卑職問出官吏取受、及將田雲童等招詞開申、広平路不行申覆上司、止照小節不完、又令卑職帰問。中間窒礙、不能尽言。看詳。人子之道、理当報本、毆母致死、罪莫大焉。若不僭呈、差官前来、審録帰結、実非卑職独力可弁之事。得此。差

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

委前兩淮轉運塩使司同知忽都牙里鞠問、是実。除田雲童別行結案外、問出成安県達魯花赤太帖木兒狀招。受訖田雲童弟田安中統鈔一十五定・雜色暗花段子八疋・毛子一疋。除回付外、入己鈔七定、折至元鈔七十貫、依枉法例、決訖八十七下、除名不叙。典史趙璧、要訖田安中統鈔四定三十兩・段子三疋、除回付外、入己中統鈔一定、係枉法。接行司吏周德華、受訖田安中統鈔三定、折至元鈔三十貫、係不枉法。各決訖五十七下、罷役不叙。肥郷県達魯花赤亦的・典史李榮・司吏孫榮祖狀招。不合食用田安酒食、將復檢屍傷脫傷、驗作因風氣病身死。將達魯花赤亦的量決四十七下、罷職不叙。典史李榮五十七下、罷役。司吏孫文質又招、要中統鈔三定、折至元鈔三十貫、係枉法。決杖七十七下、罷役不叙。広平路官・首領官、不合不即飛申上司、及不勾追赴路帰問罪犯、別行外。都省議得。知州張奉訓、守正奉公、直申省部、弁明惡逆重事、糾正枉法官吏、除以優加陞用外、合下仰照驗施行。

・・・・・・・・・・・・・・・・

大徳十一（一三〇七）年正月二日に、成安県の田雲童が弟田二を麵打ち棒で殴打し、なだめに入つた母阿耿の頭を誤って打傷し死亡させる。この件につき初検にあつた同県の達魯花赤太帖木兒は、田雲童の弟田安より賄賂を受け、屍状をでっちあげて病死という検屍結果を下し、また同じ検屍結果を復検においても下すように、田安をして酒食の饗応をせしめ、復検官たる肥郷県の達魯花赤亦的に要請する。

当時の制度上、初検官と復検官とが口裏合わせをすることを防ぐ意図から、同路内他県の官吏がそれぞれ初検・復検の任にあたることになつていたと考えられる。<sup>(2)</sup>だが、第二節の「刑部呈」にいうように「初・復検にあたる官吏らが相まみえ、検屍結果につき口裏を合わせ」なくとも、ここでの田安のように、口裏合わせを仲介する者が

検屍現場にいることから、またなによりも、いともたやすく贈賄に応じる官吏たちの綱紀の乱れから、防止機能が十全に働いているとは言い難い状況にあったようである。収賄についての妙な信頼感とでもいえようか。初検官太帖木見は田安を介しての彼らの要請が、よもや復検官に応じてもらえない、言い方を変えれば、復検官が田安より賄賂を受け取らないなどということを、はなから思ってもみなかったといえそうである。

もう一案「官吏の検屍違錯…官吏検屍違錯」(『元典章』五四・刑部卷之一六)をみてみる。<sup>③</sup>死亡者遺族の虚偽の告言に沿った検屍がなされ、その検屍結果につじつまを合わせるかのような取調べが検屍現場で行われた事案である。

皇慶元(一二三二)年四月、袁州路が奉じたる江西行省の劄付……江西行省が移り<sup>おく</sup>准けたる中書省の咨。都省が送り<sup>う</sup>扱けたる刑部の呈。新建県吏王汝椿の検屍不明について、照得したる大徳六(一二三〇)年三月二十九日に刑部が奉じたる省判。刑部の呈。山東宣慰司の関。濟寧路鄒平県が取調べをおえた王伴兒と喬小驢らとが黄喜兒を殴打し、黄喜兒が王伴兒を蹴り殺した一件。取調べを移し路にまかせて再度の取調べをした結果、実際には、王伴兒が木に登り体の重みでその枝が折れ、転落死したということが判明いたしました。証人も多くはつきりとしております。刑部が議し得たり。黄喜兒は、もともと鄒平県<sup>の</sup>取調べでは、靴をはいた足で王伴兒を蹴りつけ傷を負わせ死亡させましたと罪を認める供述をしておりました。ところが再度の取調べでは、実際には、王伴兒が木に登り転落死したということが判明し、そのことにつき関係人らの証言も一致しておりますし、虚偽の告言を行ったとする死亡者の遺族王阿劉らの罪を認める供述も取り<sup>お</sup>えてお

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について



ります。宣慰司の擬（判断）するところを准め、黄喜児を詔恩に欽依して釈放し、先に徴収した焼埋銀四定は返還すべきだと擬することといたします。そのほか、黄喜児の兄黄成が「王伴児は木の枝が折れて転落死したのです」と既に検屍現場で告げていたのに、即ちにそのことを問いたださず、また親しく検屍を監なかつたことから、輒しくも、王伴児の致命原因は蹴りつけ傷を負わされたためとする件作行人（検屍人）陳全の見立てをそのまま認めて、以前靴をはいた足で王伴児の右腮から耳にかけ、それに内股の急所を蹴りつけ傷を負わせたことがあり、その傷により王伴児が死亡したとする供述を黄喜児から取り訖えましたと初検官鄒平県尹張亨・典史宋宥らが罪を認めて供述するところについて、各人の罪は已に釈放されております。県尹張亨は現職より一等を降して一年後別職につけ、典史宋宥・司吏劉居敬は役務を罷めさせ、再び叙用しないのが相応でありましょう（以上、刑部の呈）……中書省が江西行省に咨して上の依に施行せられんことを請う…皇慶元年四月、袁州路奉江西行省劄付……移准中書省咨。送拋刑部呈。新建県吏王汝椿検屍不明、照得大徳六年三月二十九日奉省判。本部呈。山東宣慰司関。濟寧路鄒平県帰問到、王伴児与喬小驢等毆黄喜児、將王伴児踢死。移委隸路推問得、王伴児委因上樹庄折樹枝、掉下斃死。衆証明白。本部議得、黄喜児元招、用脚穿靴隻將王伴児踢傷身死。再行帰問得、王伴児委因上樹掉下斃死、其一千人等指証相同、取訖苦主王阿劉等虚告招伏。合准宣慰司所擬、將黄喜児欽依詔恩釈放、先追焼埋銀兩四定擬合回付。外拋初検官鄒平県尹張亨・典史宋宥等所招、黄喜児兄黄成既曾告訴王伴児庄折樹枝、掉下斃傷身死、不即究問、又不親監検屍、以致件作行人陳全將王伴児作踢打所傷身死、輒憑取訖黄喜児曾用脚穿靴隻於王伴児右腮連耳并交当内不便処踢傷身死。各人罪犯、已經釈放。將県尹張亨量擬降先職一等、期年後別叙。典史宋宥・司吏劉居敬、罷役不



叙相応……咨請依上施行。

大徳六（一三〇二）年三月以前、鄒平県の王伴児・喬小驢らと相争うなか、黄喜児が王伴児を蹴り殺したと告げられた一件。この一件、じつは王伴児が木から転落死したものを、彼の遺族王阿劉らが黄喜児の犯行であると虚偽の告言を行ったものである。ところが、検屍人陳全は王伴児致命の原因を蹴り傷によるものとし、初検にあたった鄒平県尹張亨は、黄喜児の兄黄成が王伴児の死は木からの転落死であると告げているのにもかかわらず、以前靴をはいた足で王伴児の右臑から耳にかけ、それに内股の急所を蹴りつけ傷を負わせたことがあり、その傷により王伴児が死亡したとする供述を黄喜児から取り終え、事进行处理してしまう。

検屍の実務にあたる陳全は遺族の告言に沿って致命の原因を見立て、親しく検屍を監視しない張亨は、その見立てをそのまま認めて検屍現場での取調べを進める。いかにも杜撰な検屍・取調べである。<sup>(4)</sup>おそらく遺族の告言より黄喜児の犯行であると決め込んだ張亨が、不実な検屍結果につながりそうな言葉が黄喜児の口へのぼるまで、何度も繰り返し尋問する姿が目につかぶ。「靴をはいた足で王伴児を蹴りつけ傷を負わせ」という言葉が黄喜児の口へのぼったとき、ああそれだとばかりに、その以前の蹴り傷を致命の原因としたものと思われる。

（１）校定本第二冊五二六頁以下。点校本第三冊一八〇八頁以下。

（２）磁州成安県・肥郷県はともに広平路に属する（『元史』地理志一・卷五八・志一〇）。馬廷傑らの初検に対しても復検が行われただろうが、それは「官典の刑名違錯」に見える博羅県（惠州路に属する）とはまた別の官司だったと考えられる。馬廷傑らの番禺県が属する広州路には、他に録事司と、南海・東莞・増城・香山・新会・清遠の六県が

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

あった『元史』地理志五・卷六二・志一四)。

(3) 校定本第二冊五五〇頁以下。点校本第三冊一八二九頁以下。

(4) 具体的な案件ではないが、第二節の「刑部呈」冒頭、本稿省略箇所にある帰徳府の申文もまた杜撰な検屍・取調べが行われていたことを示す。その申文中には、事件として処理することの煩わしさを厭ったのか、ここでの張亨らの検屍とは異なり、殺人事件を自死と見立て、その検屍結果に都合よい供述が得られるまで、取調べ(被害者遺族などに対する尋問)を繰り返して供述を換えさせ、告言についても、州県の司吏が通じて言葉をでっちあげて、告げられた内容を覆い隠し、巧妙に似ても似つかぬ内容の書状としてしまう弊害が記されている。帰徳府申文に見える「必須追究往來、補答扣換」また「州県司吏通行捏合、虛套元告詞因、啜賺元告絶詞文狀」の二句、やや難解である。しばらく、ここに記したように解しておきたい。

#### 四 正犯人と干犯人

本論に戻る。梁伶奴が蔡敬祖殺害の事実を認めて、自ら手にかけて蔡敬祖を殺害した正犯人として検屍帳に署名しようとしなかったために、馬廷傑は自らの一存で検屍帳上に印刷された「正犯人」の箇所に「被告人」の三字を書き添え、梁伶奴と戴寿安とをしてそこに連署をさせる。馬廷傑はなぜこの様式違反という、事が容易に発覚しそうな挙にでたのだろうか。第二節の「屍帳式様」には、検屍帳上「検屍人等」に署名させる項目として「正犯人」の他に「干犯人」「干証人」「地隣人」「主首」「坊・里正」などが印刷されている。<sup>1)</sup>「干証人」以下はすぐわかないとしても、干犯人として梁伶奴と戴寿安とに署名させることはできなかったのだろうか。このことを考えるために、ここで「干犯人」が見える二つの案件を紹介しよう。

まずは「違法に収監され生を軽んじ自縊する…枉禁輕生自縊」(『元典章』五四・刑部卷之一六)をみてみる。<sup>(2)</sup>  
刑事的な処置の遅延から未決囚が監獄内で自縊する事案であり、ここには「正犯人」と「干犯人」とが同時に見える。

大徳十一(一二三〇)年六月、江西行省が准<sup>う</sup>けたる中書省の咨。審録につき特に任じられた委官前刑部主事李居禁の呈。中書省の劄付を奉じて江西行省へ赴き、中書省の任じた瑞州路同知鄭朝列と一同<sup>ども</sup>に収監中の罪囚を審録(罪の有無を確認)いたしました。そのうち吉州路録事司の一件、獄官肖徳と陳万が鍾三を収監し自縊させたことについて、参照したる文書中、取り訖えたる録事司達魯花赤小雲失海牙の供述調書に見える罪を認める供述。大徳九(一二三〇)年十一月十四日、「劉季三と姓名不詳の塩客一人が夫を尋ねきて外に呼び出し打ち殺しました」という李阿劉の訴状を拠<sup>よ</sup>けました。そしてこの件につき同司録事及び判官と一同に取調べをおえましたが、この取調べのなかで正犯人劉季三はすでに「李重二を蹴り殺しました」という罪を認める供述を、干犯人鍾三は「口曲がりの乞食の子、人から金を借りて返しもしないと、かつて李重二を罵ったことがあります、今次劉季三の暴行から李重二を救おうとはしましたが従われず、劉季三が李重二を蹴り殺すという結果になりました」という劉季三の罪についての供述をいたしております。そしてこの件につき上申して、鍾三は事に深く関わるまさに取り調べるべき人物なので、再び各人を取り調べて、罪を認めて供述するところに異なりがないならば、ただちに罪の輕重を分間(區別)して、例に依り発落(処置)せよとの吉州路の指揮駁問を奉じましたが、不合<sup>ふあひ</sup>にも、「夫は鍾三に蹴り殺されました」と被害者の妻李阿劉が元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

何度も訴えてくるのに、そのことを認めようとしないう鍾三を六十余日もの間鎖をつけて収監し、その結果、生を軽んじた鍾三が監獄内で自縊してしまうこととなりました。罪を認めて供述いたしますところ、是れ実でございます（以上、小雲失海牙の供述）。録事紀録・判録蔣祥・典史劉顯・司吏曾文信ら・吉州路の吏劉宣の罪を認めて供述するところも、この小雲失海牙の供述と異なりません。若べく処置すれば、監獄内での縊死という人命事理に係ります（以上、李居禁の呈をうけ、都省が案件を刑部に送り、刑部が議し得て都省に上呈する。録事司達魯花赤小雲失海牙・録事紀録・録判蔣祥・典史劉顯等が供述するところは、鍾三から「劉季三が李重一を蹴り殺したことについて、極力李重二を救おうとしたわけではない」という罪を認める供述を取り訖えたといっても、罪の軽重を分間して発落せず、八十余日もの間鍾三を違法に収監し、その結果、鍾三が監獄内で自縊してしまったことでもあります。各官罪は革撥（刑罰の免除）を経ておりますので、例に比して、俱に現任を解き、別に求仕させるほか、司吏劉宣らについては、各の現役を罷め、このことにつき通行く過名を解由（履歴）内に標附するのが相応であります（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省は江西行省に咨して請う、上の依に施行せられんことを。大德十一年六月、江西行省准中書省咨。所委官前刑部主事李居禁呈。依奉省劄、前去江西行省、与省委瑞州路同知鄭朝列、一同審録見禁罪囚。罪囚起内、吉州路録事司一起、牢子肖德・陳万監禁鍾三、自縊身死、参照過行卷、取訖録事司達魯花赤小雲失海牙状招。大德九年十一月十四日、拋李阿劉告状。劉季三同不得姓名塩客一人、将夫尋喚出外打死。与本司録事及判官一同帰問、正犯人劉季三已招。将李重二踢死。干犯人鍾三招指。曾将李重二罵作歪贅乞人子、少人錢不還語句、及向前救勸不從、致係劉季三将李重二踢死。申奉到吉州路指揮駁問、鍾

三即係緊關合問人數、再行引審各人、所招無異、即合分問輕重、依例發落、却不合為苦主李阿劉節次告稱、夫係是鍾三踢死、不肯准伏、因此、將鍾三鎖禁六十余日、以致在禁輕生自縊身死。招伏是實。錄事紀錄・判錄蔣祥・典史劉顯・司吏曾文信等・吉州路吏劉宣、所招無異。若便予決、緣係在禁縊死人命事理。送刑部、議得。錄事司達魯花赤小雲失海牙・錄事紀錄・錄判蔣祥・典史劉顯等所招、雖是取訖鍾三因劉季三踢死李重二、不行極力救勸招伏、却不分問輕重發落、枉禁八十余日、以致在禁自縊身死。各官罪經革撥、比例、俱解見任、別行求仕外、擬司吏劉宣等、各罷見役、通行標附過名相応。都省咨請、依上施行。

.....

大德九（一二〇五）年十一月十四日、劉季三と鍾三とが李重二を訪ねきて、そのうち劉季三が李重二を蹴り殺す。この李重二殺害につき劉季三と鍾三とが、それぞれ正犯人・干犯人として供述する。曰く「李重二を蹴り殺しました」（正犯人劉季三）、曰く「口曲がりの乞食の子、人から金を借りて返しもしないと、かつて李重二を罵ったことがあります、今次劉季三の暴行から李重二を救おうとはしましたが従われず、劉季三が李重二を蹴り殺すという結果になりました」（干犯人鍾三）と。この一件、事の次第は明らかであり、罪の輕重を区別して先例どおりに処置せよとの指示を吉州路より受けるが、「夫は鍾三に蹴り殺されました」という、李重二の妻李阿劉の執拗な言いかけから鍾三に対する（干犯人としての輕微な）処置が遅延し、そのために、生を輕んじた鍾三が獄内で自縊してしまふ。

自ら手をくだし殺害を実行した者は正犯人としての署名を求められ、それに加担した幫助者やそれを決意させた教唆者は干犯人としての署名を求められただろう。ただ、こうした幫助者や教唆者より広く、犯罪に何らかの

関わりがあり、その関わりがゆえに罪に問われる者もやはり干犯人としての署名を求められただろうと考えられる。

鍾三は劉季三と連れ立って李重二の家を訪れ、そのおりに劉季三が李重二を蹴り殺す。鍾三は殺害現場に居合わせたとはいえ、劉季三の犯行に加担することはない。犯行に加担するのではなく、むしろ犯行を制止している。「今次劉季三の暴行から李重二を救おうとはしましたが従われず、劉季三が李重二を蹴り殺すという結果になりました」「劉季三が李重二を蹴り殺したことについて、極力李重二を救おうとしたわけではない」という鍾三の供述内容は、ともにそのことを示している。このことからすると、鍾三と劉季三の犯行との関わりは、劉季三と連れ立って李重二の家を訪れたことに尽きる。あるいは多分に不穩当であろうこの訪いがあればこそ、劉季三の犯行がある。したがって、鍾三は劉季三の犯行に関わりある干犯人として、正犯人劉季三とは「罪の輕重を分間し」た応分の罪に問われるべきだということであろう。

もう一案「息子が母の姦夫を打ち殺す・男打死母奸夫」(『元典章』四二・刑部卷之四)をみてみる。<sup>(3)</sup>父を欺き母を寝取った姦夫を息子が打ち殺した事案である。ここには「干犯人」が見える。

至元八(一二七七)年正月、尚書省が掬けたる刑部の呈。真定路が取調べをおえた郭驢兒の罪を認める供述。目の不自由な父郭喜を王聚が欺き、母阿趙と通姦を繰り返し、父を家から追い払ってしまい、父は物乞いに身をやつしております。このため、「讐に報いておくれよ」という父の言葉を耳にしたことがあり、そこで王聚に対する恨みをいだきました。その後家を訪ね、王聚と母阿趙とが一緒に食事をとるところを目に

し、私は王聚の肩を一度打ちつけました。王聚は立ち上がり、担ぎ棒を手に反撃し、これに対して私が棍棒で王聚を打ちつけ死亡させてしまった罪でございます（以上、郭驢児の供述）。この郭驢児の供述をうけ、刑部が議し得たり。郭驢児を杖七十七下とし、姦婦郭阿趙は杖八十七下、膚脱ぎでの受刑とする。干犯人郭喜は罪を免ずる。なお調査して、王聚より貰い受けた二十両相当の縁切り料が現に存在するならば、それを焼埋銀として王聚の家族に付し、もし存在しないならば、焼埋銀の徴収は免ずる。照詳せられんことを乞う（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省が参詳する。郭驢児を五十七下に決し、その余は刑部の擬（判断）を准める。施行せられよ…至元八年正月、尚書省掾刑部呈。真定路帰問得郭驢児。因為王聚欺父郭喜眼昏、与母阿趙通奸不絶、遣趕父郭喜出外乞化、曾得父為我報讐語句、以此懷恨。在後因去探家、又見王聚与母阿趙一处喫飯、是驢児将王聚肩上打訖一下。本人起来、拿摸担子還擊、驢児用棍棒行打致死罪犯。本部議得、擬将郭驢児杖七十七下、奸婦郭阿趙杖八十七下、去衣受刑。干犯人郭喜免罪。仍勘当元要王聚錢物折鈔二十両、如有見在、追付王聚家属。如無、免徵。乞照詳。都省参詳。仰将郭驢児決五十七下。余准部擬施行。

・・・・・・・・・・・・・・・・

至元八（一二七七）年正月以前、真定路。目の不自由な父郭喜を欺いて、その妻阿趙との通姦を繰り返し、ついには彼を家から追い払ってしまった王聚を郭驢児が打ち殺す。「讐に報いておくれよ」という、物乞いに身をやつした郭喜の言葉より王聚に対する恨みをいだき、家を訪ねたおりに、王聚と母阿趙とが一緒に食事をとるところを目にして犯行に及んだものである。

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

郭驢児は「讐に報いておくれよ」という郭喜の言葉を思い出し、王聚と阿趙とが暮らす家へ赴いたのだろうか、郭喜から王聚殺害を哀願されたわけではない。むしろ王聚と阿趙とが一緒に食事をとるところを目にし、息子としての感情を抑えきれずに、王聚の肩を一度打ちつけないという暴挙に出、王聚の反撃にでくわしたことから、それが昂じて王聚殺害に至ったと思われる。このことからすると、郭喜と郭驢児の犯行との関わりは、漠たるものとして「讐に報いておくれよ」と語り、郭驢児を王聚と阿趙のもとへと赴かしたということに尽きる。郭喜は干犯人とされ、その罪を免ぜられている。免罪理由は不明であるが、犯行との関わりが深くはなく、科されるべき刑罰が軽微だったことにもよるだろう。<sup>(4)</sup>

(1) このうち干証人と主首について特に説明をくわえる。『元典章』刑部中に「干証人」が見えることは案外少ない。その一例「碾にひかれ死亡した屍を移す・碾死人移屍」(『元典章』四二・刑部卷之四。至元三(一二六二)年八月。碾槽内で崔中山が碾にひかれて死亡しているのを発見した碾の見張り人閻喜僧が崔中山の死亡とどのように関わっているのが問われる。校定本第一冊一六五頁。附録「元典章の文体」(元典章に見えた漢文吏牘の文体)三頁以下に吉川幸次郎氏訓読あり。点校本第三冊一四七七頁以下)では、崔中山の遊び友達の少年殷定僧ら三人が干証人として「崔中山は碾内で米をもてあそび、俺ら三人は碾外で遊んでおりました。碾の見張り人はおりませんでした・崔中山於碾内弄米来、俺三個碾外耍来。趕碾的人無来」と証言する。崔中山の死亡状況についての目撃証言である。

徴税・勧農などのため郷村に里正が置かれるが、その里正を輔佐する職役が主首である。『元典章』刑部中に「主首」が見えることもまた案外少ない。「木槌で人を打ち殺すは故殺にあたる・木槌打死人係故殺」(『元典章』四二・刑部卷之四。皇慶元(一三二二)年八月、袁州路宜春県。ともに飲酒して酔った潘壬一が劉仁可を木槌で打ち殺す。李季二が密売する牛肉を押収し官に届け出ようと劉仁可が言いだしたことが争いの原因である。校定本第一冊一九頁以下。点校本第三冊一四三七頁以下)には、鍾奇叔が起こした嫁入りどきの持参田の訴訟につき主首劉仁可が潘壬



一の召喚にあたる例が見える。

(2) 校定本第二冊五三三頁以下。点校本第三冊一八一四頁以下。

(3) 校定本第一冊一五五頁。点校本第三冊一四六八頁以下。

(4) 例えば、「通姦が原因となり殺害するも、たまたま死を免れ生き返る…因姦殺人偶獲生免」〔『元典章』四二・刑部卷之四。至元三二一二六六年十一月、東平路。閔興児が通姦相手の梁当児を打ち殺そうとするも、彼女は死を免れ生き返る。このとき、閔興児による暴行で両足不具になった梁当児は、篤疾者として、本来受けるべき通姦の罪を免ぜられる。校定本第一冊一五二頁以下。点校本第三冊一四六六頁〕をみると、罪人の年齢的・身体的状況により、盗罪・傷害罪については贖刑が許され、雑犯については免罪されるなどの場合が元代にもあったと考えられる（唐名例律「老少廢疾」条Ⅱ名例三〇、明名例律「老少廢疾取贖」条と同旨）。郭喜の免罪は、この贖免制度と関係するのではないかと思われるが、郭喜の年齢的・身体的状況が不詳なため確たることはいえない。

## 五 検屍現場でのせめぎ合い

干犯人と犯行との関わりが前節に述べたとおりとすれば、干犯人に科される刑罰は、正犯人に科されるそれと比し、かなり軽微なものとなり得るだろう。してみれば、蔡敬祖殺害の現場には居合わせたただけの者として、「干犯人」の項目下、梁伶奴と戴寿安とに署名するよう求めても、彼らにさしたる異存はないように思われる。<sup>(1)</sup>

ところが、馬廷傑はそうはしない。そこには、検屍帳の署名をめぐる加害者と検屍官との間のせめぎ合いだけではなく、被害者の遺族と検屍官との間のもう一つのせめぎ合いがうかがえる。以下このことについて考えてみる。<sup>(2)</sup>

元代の刑事手続きにおいて、被害者遺族らの告言や証言などが忽せにされることはなかった。<sup>(2)</sup> 殺人の場合に限つ

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

たことではない。例えば、「違法な拷問を加え、釈免以前にまだ罪を認める供述を取りおえていない場合…枉勘革前未取到招伏」(『元典章』五四・刑部卷之一六)をみてみる。<sup>(3)</sup>強盜被害者の妻の証言をそのまま認めて違法な取調べが行われた事案である。

延祐二(一三二五)年三月、江西省が拠<sup>つ</sup>けたる広東道の呈。広東道が准<sup>う</sup>けたる広東廉訪司の牒。先ごろ広州路番禺県郭一哥が強盜にあい、その取調べにあたつた同県の簿尉史彰信が無辜の民馮法大らに違法な拷問を加え、ありもしない罪を認める供述をさせ、後に行われた博羅県での取調べ中に、馮法大ら各人が先だつての自らの供述を翻した事、及び弓手朱祿孫が林聖護を打ち殺した等の事について。革撥(刑罰の免除)以前に取りおえた罪を認める供述はないといつても、弓手陳英らによる自らの罪を認め、簿尉史彰信らの罪について語る供述は明白であり、あわせて同県の文書も参照することができます(以上、広東廉訪司の牒)。

この広東廉訪司の牒をうけ、広東道が上申し奉じたる行御史台(江南行台。以下も同じ)の劄付。行御史台が御史台に咨<sup>わ</sup>を移り、その回報として准けたる御史台の咨。御史台が上呈し奉じたる中書省の劄付。都省が案件を送り、刑部が議し得て都省に上呈する。番禺県の簿尉史彰信・典史陳珪・司吏潘頤らは、郭一哥が衣服鈔両を強奪されたことにつき同県が詳しく取調べを行わないことから、ただ被害者郭一哥の新婦陳二姐の証言をそのまま認めて、無辜の民馮法大ら八名に違法な拷問を加え、ありもしない罪を認める供述をさせて盜賊となし、贓物を召し上げて官に到らせました。しかし、この件について博羅県が取調べを行ったところ、馮法大ら盜賊とされた者たち各人が先だつての自らの供述を翻し、召し上げて官に到<sup>と</sup>らされた贓物も俱に多

くの人から借りたり、買ったたりしてかき集めてきた物であることが判明いたしました。簿尉史彰信らについては、革撥以前に取りおえた罪を認める供述はないといっても、同県のもとの証拠調べでその罪は明白であります。此をもって参詳する。簿尉史彰信らの犯すところについては、已に下された擬（判断）を准めて、簿尉史彰信は現任を解き、別に求仕させることとし、典史陳珪・司吏潘頤らは役務を罷めさせ、再び叙用しないことといたします。その他朱祿孫については捕盜にあたる官兵であり、差し向けられて林聖護を監収する間に、彼が牆を越えて脱走するという事態になり、官山嶺上まで追いかけてゆき、そこで追いつき、逮捕しようとしたところ抵抗にあつたために、棍棒で林聖護を殴傷し死亡させたものであります。もとより公務による殺害であり、情況からして故殺ではありません。罪は釈免を経ておりますので、焼埋銀についても、徴収せよとは議し難くありましょう（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省はその擬を准める。

仰せて照驗施行せしむ。延祐二年三月、江西省掇広東道呈。先為広州路番禺県郭一哥被劫、本県簿尉史彰信将平人馮法大等枉勘虚招、博羅県追問、各賊番異、及弓手朱祿孫将林聖護打死等事。革前雖無取到招伏、却縁弓手陳英等招指明白、并本県案卷可照。申奉行御史台劄付。移准御史台咨。呈奉中書省劄付。送刑部議得。番禺県簿尉史彰信・典史陳珪・司吏潘頤等、因郭一哥被劫衣服鈔両、本県不行詳情推問、止憑事主郭一哥新婦陳二姐学説、将平人馮法大等八名枉勘、虚招作賊、追賊到官。博羅県帰問得、各賊番異、已追到官贓物俱於諸人処借買。掇簿尉史彰信等、革前雖無取到招伏、縁本県元立案驗明白。以此参詳、簿尉史彰信等所犯、合准已擬、簿尉史彰信解見任、別行求仕、典史陳珪・司吏潘頤等罷役不叙。外掇朱祿孫即係应捕官兵、被差将林聖護監収、為本賊越牆在逃、趕至官山嶺上、因林聖護拒捕、用棍将本人殴傷身死。事本元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

因公、情非故殺。罪經釈免、拋焼埋銀両、難議追理。都省准擬、仰照驗施行。

延祐二（一三二五）年、盜賊事件の取調べにあたり、番禺県の簿尉史彰信らは被害者郭一哥が衣服鈔両を強奪されたことにつき、郭一哥の新婦陳二姐の証言をそのまま認めて、無実の馮法大ら八名に対して違法な取調べを行い、虚偽の供述をさせて盜賊に仕立て上げる。このとき手の込んだことにも、贓物まで召し上げて官にもたらしめている。その後博羅県で行われた取調べで、馮法大らが先だつての供述を翻したことから、史彰信らの違法な取調べが発覚し、官にもたらされた贓物もすべて多くの<sup>(4)</sup>人から借りたり、買ったりしてかき集めてきた物であることが判明する。

ここでは陳二姐の証言に沿って取調べが行われ、偽の贓物を調達までして、番禺県から広州路に案件が上申されている。そして広東廉訪司の指示による博羅県の取調べで、史彰信らによる違法な取調べの事実が発覚するが、そうでなければ、馮法大ら八名もの無辜の民が危うく冤罪に陥るところだった。<sup>(4)</sup>あるいは、捕盜の功をあげるため史彰信らにうまく利用された観もあるが、それにしても、彼女の証言が忽せにされてはいない。

殺人の場合については既にみた。前節までに紹介した案件を振り返ってみよう。第三節の「官吏の検屍違錯」では、加害者とされる黄喜児の兄黄成が告げる「王伴児は木の枝が折れて転落死したのです」という言葉に与することなく、件作行人陳全は被害者とされる王伴児の遺族王阿劉らの虚偽の告言（王伴児が黄喜児に殺害されたとする告言）に沿って致命の原因を見立て、親しく検屍を監視しない鄒平県尹張亨は、その見立てをそのまま認めて検屍現場での取調べを進める。また、第四節の「違法に収監され生を軽んじ自縊する」では、劉季三が李重二を

蹴り殺したという事の次第が明らかであるにもかかわらず、「夫は鍾三に蹴り殺されました」という李重二の妻李阿劉の執拗な言いかけから干犯人鍾三に対する処置が遅延してしまい、そのために、生を軽んじた鍾三が獄内で自縊する。

告言や証言と同じく、検屍現場で検屍帳「屍親」の項目下に署名を求める際にも、被害者遺族の意向が忽せにされることはなかっただろう。自らの告言内容や証言内容などにそぐわない記事ある検屍帳に、そのまま署名をする謂れはない。異議を唱え、納得し得る説明を要求し、なされた説明に納得できなければ署名を拒むことが普通に想定される。期限内で検屍帳を作成すべき検屍官にとって、この署名拒否による作業の遅延は是非とも避けたいところである。馬廷傑らの検屍は、もし梁伶奴と戴寿安を「干犯人」の項目下に署名させれば、まさにこの署名拒否による作業の遅延が生じる可能性がきわめて大である。「梁伶奴らが土地を争い、そのことが原因で夫蔡敬祖を打ち殺してしまいました」という告言から察するに、被害者の妻蔡阿陳は梁伶奴らこそを、その手にかけ夫を殺害した正犯人と考えており、その梁伶奴が「正犯人」の項目下ではなく、「干犯人」の項目下に署名しているとなれば、そのような検屍帳に彼女が異議を唱えないはずはない。そして馬廷傑には、そのことにつき蔡阿陳が納得し得る説明などできるはずもないから、おそらく署名拒否となる。かといって、小賢しくも「正犯人」「干犯人」の項目が未署名のうちに、蔡阿陳から「屍親」の項目下への署名を得ることは得策でない。第二節の「刑部呈」に「(検屍帳は三幅作成し) 一幅は苦主に給付し、一幅はのりづけし連ねて一件文書の一部とし、一幅は本管の上司に上申させる」とあるように、作成された検屍帳の一幅は「苦主」、すなわち蔡阿陳に給付されることになっており、この給付を受けた時点で蔡阿陳はやはり異議を唱える。小賢しいことをしただけ、その

異議の声は大きなものになろう。いずれにせよ彼女の異議は避けがたい。

馬廷傑が検屍帳の様式をことさらに改変し、「被告人梁伶奴・戴寿安」と連署させたことには、蔡阿陳との間に生じ得る前記の好ましくないせめぎ合いに陥らないようにという慮りがあったと思われる。「被告人梁伶奴・戴寿安」と署名させた傍らには、「正犯人」の三字が抹消されないままにある。これなら、梁伶奴らを正犯人とする彼女の告言内容からは離れておらず、取調べをしたうえで、彼が重罪に問われる旨を蔡阿陳に説明し得るといえよう。皮肉なことにも、検屍現場では、この検屍帳の様式改変でなんとか蔡阿陳を言い包めたが、審録の間では、その様式改変が廉訪司の目にとまり、そこから方式違反の検屍が発覚する。馬廷傑らにとっては残念な結果をまねいたという次第である。

(1) 例えば、「二罪が俱に發覺すれば、その重き者を以て罪を論ずる…諸犯二罪俱發以重者論」(『元典章』四六・刑部卷之八。至大二〇九年二月、江西行省が准けたる中書省の咨。校定本第一冊二六三頁以下。点校本第三冊一五六七頁以下)をみると、複数の罪が俱に發覺した場合、そのうち最も刑罰の重い罪をもって論罪科刑する原則が元代にもとられたと考えられる(唐名例律「二罪從重」条Ⅱ名例四五、明名例律「二罪俱發以重論」条と同旨)。蔡敬祖殺害の現場に居合わせた干犯人とされても、その刑罰が輕微ならば、梁伶奴と戴寿安には既に認めた魏貴一傷害の罪があるので、科刑は専らそれによることになろう。

(2) 第三節の注(4)に記したような場合(供述を換えさせ告言内容を覆い隠す)は、もちろん是認されたものではない。あくまで「弊害」である。

(3) 校定本第二冊五三四頁以下。点校本第三冊一八一六頁以下。

(4) 文書の行移につき明記されないが、普通なら、番禺県から広州路へと案件が上申され、それを審録した広東廉訪司が、捕盜にあたった簿尉史彰信らの取調べに疑わしい点(広州路番禺官吏の違法)があると判断したために、恵

州路博羅県での再度の取調べを指示したということであろう。馬廷傑らの方式違反の検屍案件と同じ文書行移をたどる。

## 六 肅政廉訪司と刑部官

最後に「屍帳には先に正犯の名色を標写せず…屍帳不先標写正犯名色」を紹介する。<sup>(1)</sup>第二節に紹介した「検屍方式」〔『元典章』四三・刑部卷之五冒頭〕に続けて置かれ、延祐二（一三一五）年の検屍帳様式改正のことが見える。

延祐二（一三一五）年三月、江西行省が准けたる中書省の咨。御史台の呈。御史台が准けたる江南行台の咨。広東廉訪司の申。切に謂<sup>おも</sup>う。刑名の重さについていえば、殺人より嚴なるものはなく、その裁きは必ず検屍より始められねばならない。思うに、事件の次第は千差万別であり、共謀して殴打を加え、一体誰が最も手ひどく殴打を加えたのか判然としない場合もあれば、共謀殺人において、一体誰が首謀者なのかを決し難い場合もある。また、甲の犯行であるものにもかかわらず、被害者の遺族らが仇敵とする乙の犯行だと言いつてる場合もあり、乙の犯行だが、実行行為そのものは、その手下に担わしているという場合もある。こうした類は、まさにいまだ枚挙するに易<sup>やす</sup>からずであります。今省部（中書省刑部）が定めた検屍方式には、「正犯」と「干犯」との項目を区別して記すことになっております。事件の次第が明白なものについては、検屍の場で致命原因たる傷を認定し、それを負わせた者を「正犯人」の下に署名させても障りはありません。

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について



しかし、もし被害者の遺族らが私怨を含み、不実を告げている場合には、にわかには事件の実情を決し難く、子細を取り調べたうえで、初めてそれが得られるということにもなりましょう。このとき検屍場で、犯行を告げられた者に対して「正犯人」の下に署名をするように、若<sup>たやす</sup>便く無理強いをし、以後の取調べの結果、他に正犯人がいることが判明したような場合には、その無理強いをされた者は、異日必ずや（別件の取調べにおいて）、「もともと正犯人ではなかった（のに危うく正犯人に仕立て上げられかけた）」ということを指弾し、よって（たとえ今回の件では正犯人だったとしても）事を覆すための糸口といたしましょう。そこでもし、彼をして「干犯人」の下に署名をさせ、被害者の遺族らに対して、いまだ致命原因たる傷を負わせた者を判然とさせることがないならば、遺族らは、必ずや判然とさせるまで随時、「遺体を引きとることはできません」という詞<sup>ことば</sup>を口にするでしょう。そこで或いは、検屍帳の様式に「被告」という二字を添え、「被告正犯人」（正犯人として告げられた者）として、その下に署名をさせたならば、それはくだされた検屍方式とは異なるために、必ずや、上司がその違錯を駁問するでしょう。地方官らが検屍に際して事情を交ぜることがあるが、それは多分に、こうした原因により引き起こされているのであります。今後、「正犯人」と「干犯人」とを、必ずしも、あらかじめ項目として印刷することはせず、もし検屍場で、犯行や致命原因たる傷を負わせた事情が、疑いようもなくはっきりと認定されるのならば、検屍帳上に「行兇正犯某人」と明確に記して署名させる。そしてもし状況が疑わしく、判然とさせることが難しい場合には、同じく「被告行兇人」と記して署名させるようにすれば、以後取調べに混乱をきたすことなく、事件の次第に疑いがないくなり、裁きがおさめ易く、冤罪濫刑を減少させることが望めましょう（以上、広東廉訪司の申、及び江南

行台の咨)。事が通例にかかわるため、御史台が中書省に具呈致します。照詳せられよ。此れを得られよ（以上、御史台の呈）。この御史台の呈をうけ、都省が送り扱<sup>う</sup>けたる刑部の呈。照し得たり。大徳八（一三〇四）年正月に承奉せる中書省の劄付に、「刑部が議し得たり。検屍には、已に常式が定められております（検屍法例を云う―双行注文）」と見えます。今本件を承<sup>う</sup>けて、刑部が議し得たり。過去、各処にて実施されてきた検屍には不正や弊害が多く生じていた。そこで様々と参酌して検屍帳の様式を定め、検屍帳上には屍身図をえがき、遍<sup>あまね</sup>行く各路に遵守させてきたのです。思うに、弊害から民を救い、不正を防ぎ、事件の次第を明白にして冤罪や裁きの滞りをなくさんがためにであります。今広東道肅政廉訪司が提言するところは、検屍帳上にあらかじめ「正犯」と「干犯」との項目を記すことには障りがあるということであります。そこで今後、検屍の際に、その場で致命原因たる傷を確定しても間違いないく、犯行にあたった者たちを取り調べて、その結果、誰が正犯人であるかが疑いなき場合には、正犯人をして「正犯人」の下に署名させる。もし、事件の実情がまだ定まらず、首犯と従犯との区別が、いまだつけられない場合には、ただ、「行兇」あるいは「被告人」という項目を設けて署名させる。もし、初・復二度の検屍において結果が明白であるのに、犯行にあたった者たちが逃亡し、にわかには捕獲することができない場合、あるいは招呼された屍親（被害者の遺族など死亡者の親族）が、いまだ到らない場合には、彼らの署名を欠くその検屍帳を、仮に一件文書にのりづけし連ねて、捺印保管し、犯行にあたった者たちの捕獲、屍親の到来をまつて署名させ、屍親にはそれを給付するようにすれば、誤ることがないでしょう。もし呈を准<sup>みこ</sup>められるならば、遍<sup>あまね</sup>行く照会されるのが相応であります。此れを得られよ（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ、都省が江西行省に咨し

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

て上の依よに施行せられんことを請う。延祐二年三月、江西行省准中書省咨。御史台呈。准江南行台咨。広東廉訪司申。切謂。刑名之重、莫嚴於殺人、獄情之初、必先於檢驗。蓋事体多端、情態万状、有同謀共毆、而莫知誰是下手重者、有同謀殺人、而莫定誰為初造意者。有甲行兇而苦主与乙讎嫌、而妄（執乙）行兇者、有乙行兇、而令在下之人承当者。若此之類、未易枚挙。今、省部定到屍形格式、於内、為是開写正犯・干犯名色。檢驗之際、如是事体明白、就場、認是致命痕傷者、令正犯人下画字、則於事体無害。設若苦主因其私怨、所告不実、倉卒之間、疑似未定、必須子細推鞠、方得其情。就場、若便抑令被告行兇人、於正犯人下画字、以後鞠問得、却係他人、則異日必指元非正犯、以為番異之階。若令於干犯人下画字、苦主未見何人承当致命痕傷、則必隨時有詞、不肯承領屍形。或是添写被告二字、作被告正犯人、於下画字、則比元降格式不同、上司必為駁問違錯。其有司官吏、臨屍檢驗之際、变乱事情、多因此致。今後、正犯人・干犯人、不須預先刊定、若是當場、認定行兇致命事情明白者、則於屍帳上、明白標写、作行兇正犯某人画字。設若事情疑似、未易分明者、則標写、作被告行兇人画字、庶望已後推鞠明白、於事無疑、獄情易弁、刑鮮冤濫。然此、事干通例、本台具呈。照詳。得此。送拋刑部呈。照得。大德八年正月、承奉中書省劄付。刑部議得。檢驗屍傷、已有常式。云檢驗法例。今承見奉、本部議得。先為各処檢驗屍傷、多生奸弊。是以參酌定立屍帳、図画屍身、遍行各路遵守。蓋欲救弊防奸、期於事得明白而無冤滯。今広東道肅政廉訪司所言、屍帳上預先標写正犯・干犯名色、事有窒碍。今後、凡檢驗屍傷、若當場、定執致命痕傷無差、行兇人等、審問明白、別無可疑者、正犯人於下画字。若事情未定、首從未分、止作行兇、或被告人画字。如初復檢驗、定執明白、而行兇人在逃、卒急不能敗獲、或招呼屍親未到处、聽將元檢屍帳、權且粘連入卷、用印関防、候獲正賊、召到屍親、至日画字給

付、庶不差池。如蒙准呈、遍行照会相応。得此。都省咨請依上施行。

・・・・・・・・・・・・・・・・

大徳八（一三〇四）年の検屍帳様式において「正犯人」と「干犯人」とを区別する署名項目が設けられ、以後その署名項目に従って検屍帳が作成されてきた。だが実際には、検屍現場で正犯人か干犯人かをにわかに決することは容易でない。そのため、検屍帳作成に必要な「正犯人」項目下の署名や「屍親」項目下の署名を、それぞれ加害者、また被害者の遺族より速やかに得ることができず、検屍帳作成、ひいては事実の究明に支障をきたす場合も生じていた。そこでこの度、広東廉訪司の提言をうけて、「誰が正犯人であるかが疑いなき場合には、正犯人をして「正犯人」の下に署名させる。もし、事件の実情がまだ定まらず、首犯と従犯との区別が、いまだつけられない場合には、ただ、「行兇」あるいは「被告人」という項目を設けて署名させる」と検屍帳様式の署名項目を改め、それを「正犯人」「行兇」「被告人」の三項目とする。

本案全体は中書省の咨文であり、その中に江南行台・御史台を通じて中書省にまで達した広東廉訪司の申文が含まれる。この申文、監察官として官吏の違法を咎めるばかりでなく、制度の不具合を体得する者として肅政廉訪司が制度改正に関わることもあった事実をよく示している。本案冒頭に見える延祐二（一三一五）年は、広東道廉訪司が馬廷傑らにつき審録した「官典の刑名違錯」の皇慶二（一三二三）年に後れることわずか二年。広東廉訪司がこの申文の提言を認める際に、馬廷傑による検屍帳様式の改変（「被告人」の三字を「正犯人」の箇所に書き添える）を承知していただろうことは、想像に難くない。だが既に述べたように、この改変は加害者からの収賄という不正がまねいた結果であり、こうした不正ある官吏を念頭に、広東廉訪司が提言を認める所以は

元代検屍制度をめぐる一裁判案件について

ない。申文の中ほど、広東廉訪司はその提言を進めるために、不正なく検屍の任務にあたりながら、加害者と被害者の遺族とのほごまで検屍帳作成の必要から致し方なく、検屍帳様式の署名項目を「被告正犯人」と改変する検屍官を想定する。あるいは実際そういう検屍官につき審録した経験から、この想定をなすに至ったと考える方がよいかもしれない。広東廉訪司自身「検屍帳の様式に「被告」という二字を添え、「被告正犯人」として、その下に署名をさせたならば、それはくだされた検屍方式とは異なるために、必ずや、上司がその違錯を駁問するでしょう」とはいうものの、なんのことはない、馬廷傑らの方式違反の検屍案件は「上司がその違錯を駁問する」ことなく、廉訪司での審録対象とされたのである。他にも同様に廉訪司での審録対象とされた案件があっても、さしておかしくはない。

こうした広東廉訪司の提言をうけて検屍帳様式が改められた。ただ、提言内容のすべてがそのまま容れられたわけではない。広東廉訪司は署名項目を「行兇正犯某人」「被告行兇人」とする。<sup>(2)</sup>これら項目の「行兇」という語は、従来の検屍帳様式に見える「干犯」とは異なる。言葉の印象からして、犯行に深く関わり比較的重罪に問われる行為に限られると思われる。<sup>(3)</sup>ともに被害者に殴打などを加えたがそれが致命の原因ではない場合や、殴打などが加えられる際に被害者を押さえつけるなどの補助行為がその典型であり、いわゆる見張り行為などは「行兇」とはされず、もし告言されたとしても「被告人」とされるにとどまると思われる。いわんや、第四節の「違法に収監され生を軽んじ自縊する」の鍾三や、「息子が母の姦夫を打ち殺す」の郭喜の行為などが「行兇」とされることはないだろう。

「被告行兇人」は、先の想定に見える「被告正犯人」や、馬廷傑による検屍帳様式の改変と、その発想を同じ

くする。「行兇正犯某人」の項目下に署名することを拒む加害者に対しては、あくまで行兇人として告言された者であり、行兇人そのものではない旨を強調して「被告行兇人」の項目下に署名するよう言い包める。一方、被害者の遺族に対しては、加害者をしてその項目下に署名せしめた「被告行兇人」は、犯行に深く関わり比較的重罪に問われる旨を強調して「屍親」の項目下に署名するよう言い包める。検屍帳作成には加害者だけではなく、被害者遺族の署名も必要であり、場合によっては、それを「屍親」の項目下になさしめることこそ難渋するだろうことを見据えて「被告行兇人」項目の設置は提言されたと考えられる。<sup>(4)</sup>従来<sup>(4)</sup>の干犯人とは異なり、犯行に深く関わり比較的重罪に問われる「行兇人」という語を、ことさら項目中に明示することで被害者の遺族がある程度納得して「屍親」の項目下に署名するよう目論まれた項目設置であろう。

審録を通じて廉訪司は検屍現場の詳細について知る。広東廉訪司のこの度の提言も検屍現場をきっちりと踏まえたものである。検屍帳作成に必要な署名を検屍現場で加害者と被害者の遺族より速やかに得るにはどうすればよいかという、その一点に提言は向けられている。ことさらに告言内容を明示した「被告行兇人」項目の設置提言はそのことをよく表している。ところが、刑部官はこれをそのまま採らず「被告人」としてしまふ。犯行との関わりの序列づけというなら刑部官が上呈し准められた「正犯人」「行兇」「被告人」の三項目でもよい。だが、署名を得るための方策ということならば話はまた別である。加害者をして「干犯人」の項目下に署名をさせた場合にも「屍親」項目下への署名を拒む被害者の遺族が、「被告人」項目下への加害者の署名で、自らの「屍親」項目下への署名に應ずるだろうか。このことを慮ればひと工夫が必要となろう。そのひと工夫が「行兇人」の明示である。検屍現場を踏まえるとはそういうことであり、惜しむらくは、検屍現場からほど遠く、中央に鎮座す

るこの度の刑部官には、検屍現場を知り、検屍帳様式の不具合を体得する広東廉訪司の提言の肝心な意図が、あるいはうまく伝わらなかったように思える。

(1) 校定本第一冊一七二頁以下。点校本第三冊一四八四頁以下。岩村忍「元典章刑部の研究」(東方学報・京都二四冊、三四―三五頁、一九五四年)に訓読訳がある。

(2) 「行兇正犯某人」は「正犯人」「行兇」「被告人」という三項目との対応からみて、「行兇某人」「正犯某人」を約めた表記であるとも考えられるが未考のままとする。某字と人字、互倒の可能性もあるが、これもまた未考のままである。「某人」二字で「なにがし」の意としておく。

(3) 例えば、検屍方式が定められた大徳八(一三〇四)年頃の案件「打死を換えて磕死とする・打死換作磕死」(『元典章』五四・刑部卷之一六。大徳八年三月以前、静江路古県。竹席を借りて返さないままの何福慶を王買驢が木棍で打ち殺すが、古県は何福慶自らが転倒死したとして王買驢を釈放する。校定本第二冊五二五頁以下。点校本第三冊一八〇七頁以下)では、殺人犯たる王買驢を「行兇人王買驢」とする。

(4) 申文中「彼(正犯人としての署名を拒む加害者)をして「干犯人」の下に署名をさせ、被害者の遺族らに對して、いまだ致命原因たる傷を負わせた者を判然とさせることがないならば、遺族らは、必ずや判然とさせるまで随時、「遺体を引きとることはできません」という詞を口にするでしょう」と広東廉訪司がいうとき、そこには自ずから、遺体引取りを拒む遺族らは「屍親」の項目下に署名することもまた拒むだろうという言外の意が含まれる。



# On a case of post-mortem examination in Yuan dynasty

Toshimitsu SHICHINO

In Yuandianzhang (元典章), one of the most famous law books of the Yuan dynasty of china (元朝, 1279-1368), we find various legal documents. Among these documents, a document titled “Officers change the crime illegally (官典刑名違錯, 1311=至大4年)” deals with the administrative punishment on two officers for their unjust post-mortem examiner’s report. On this unjust report which was made for some bribes, murderers were not punished as they were. In this paper, I would like to study the post-mortem examination system at that time with this and some other documents of Yuandianzhang.

Prior to “Officers change crime illegally”, the Yuan already had settled post-mortem examination system, and “The rules of the post-mortem examination (検屍法式, 1304=大徳8年)” shows us the system in detail. First, I illustrate the outline of the post-mortem examination system with the document, and then, refer to some problems of the system to be considered.

In 1315 (延祐2年), under the opinion of Guangdong inspector (広東肅政廉訪司), the form of post-mortem examiner’s report was changed. “post-mortem examiners do not need to write murderer’s name on the report (屍帳不先標写正犯名色)” shows us the reason of the change. I also refer to the change and the role of the inspector.